

4 Churg-Strauss 症候群が疑われる喘息患者の1例

浅川 友美・斎藤 智久

下越病院呼吸器内科

症例は60歳台、女性。

【主訴】鼻閉、湿性咳嗽、呼吸困難。

【既往歴】56才脂質異常症、60才腰椎ヘルニア、65才慢性副鼻腔炎。気管支喘息の既往なし。

【生活社会歴】飲酒・喫煙：無 アレルギー：無 ペット飼育：無。

【現病歴】2010年8月頃から咳嗽、水溶性鼻汁が続くことがあり、耳鼻科受診していた。2011年8/4より乾性咳嗽、喘鳴、手掌・背部・四肢に掻痒を伴う発疹が出現、その後も鼻閉感・呼吸困難著明で、症状増悪し8/6当院入院となった。

【身体所見】身長149cm、体重44kg、体温38.1℃、血圧135/82mmHg、脈拍121/分、SpO₂93% (room air) 意識清明、貧血黄疸なし、心雑音なし、吸気時喘鳴著明、湿性咳嗽、強い鼻閉・呼吸苦あり。

【検査所見】WBC 13600/ μ l (Bas 0.0, Eos 39.5, Lym 0.5, Mon 0.5), RBC 450万/ μ l, Hb 13.8g/dl, plt 19.6万/ μ l, CRP 8.27, ESR 76mm/h, BUN 10.3mg/dl, Cre 0.6mg/dl, Na 127.3meq/l, K 3.93mEq/l, Cl 93.9mEq/l, GOT 72 IU/l, GPT 222 IU/l, ALP 1032 IU/l, LDH 284 IU/l, IgE 2091 杉(2+)その他陽性項目なし。

胸部X線・CT：異常所見なし、副鼻腔CT：篩骨洞から上顎洞に粘膜肥厚、心エコー：異常所見なし。

【経過】mPSL80mg投与継続するも症状改善せず、37℃台の微熱が続いていた。8/12好酸球39.5% (WBC13600)と高値ありChurg-Strauss症候群疑いにてステロイドパルス療法を開始した。パルス開始後すぐに症状改善し、ステロイド漸減後も症状再燃なく9/3退院となった。皮膚生検ではChurg-Strauss症候群(AGA)に特異的な所見は得られなかった。

5 当院における胸膜悪性中皮腫の検討

藤田 七恵・鈴木 涼子・梶原 大季

杵淵 進一・松本 尚也・桑原 克弘

宮尾 浩美・齋藤 泰晴・大平 徹郎

国立病院機構西新潟中央病院呼吸器内科

【目的】今後、悪性中皮腫の増加が予想されている。そこで当院における中皮腫の現況を検討した。

【方法】2007年1月以降、当院にて胸膜悪性中皮腫と診断もしくは疑われ入院した症例22例を対象に、レトロスペクティブに臨床的検討を行った。

【結果】男性19例・女性3例。平均診断時年齢は67歳。石綿吸入歴が明らかなのは12/22例(54.5%)であり、発症までの平均年月は44年であった。診断方法は、胸水細胞診では1/17例しか診断つかず、17例に胸腔鏡下胸膜生検が行われたが、生検を行っても診断がつかないものが3例あった。積極的治療として、化学療法が16例(うち2例は手術療法も併用)に行われ、SD～CRの効果判定であったものが12例あった。全経過を観察し得た15例のうち(経過観察期間2～42ヶ月)、生存期間平均値は、化学療法なしが7ヶ月、ありが23ヶ月で、あった。また肉腫・二相型は、治療の有無に関わらず、予後が悪い傾向にあった。

【結語】当院では、2007年1月のペメトレキセド発売後、積極的に加療を行っているが予後は厳しく、今後さらに症例を蓄積して、診断・治療戦略を検討する必要があると思われる。

6 発作性交感神経機能亢進(PSH; paroxysmal sympathetic hyperactivity)を伴ったtop of the basilar syndromeの66歳男性例

田村 智・竹島 明・荒川 博之

赤岩 靖久・西澤 正豊

新潟大学医学総合病院神経内科

症例は66歳、男性。突然の意識障害、四肢麻痺、対光反射消失、眼球運動障害を呈した。頭部MRI・MRAにて中脳、左小脳、両側視床から視